

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<資料紹介> 資本主義の進化

著者	内田 成
雑誌名	川口短大紀要
巻	25
ページ	81-90
発行年	2011-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000689/



資本主義の進化

内 田 成

1. はじめに

ソースタイン・ヴェブレン（Thorstein Veblen, 1857-1929）の著作や論文はどのような方法において、また、どのような点において現代のわれわれが直面している問題に役に立つのか。1980年以降、制度という要因の重要性が認識され、制度主義的なアプローチが再検討される時、必ずといってよいほど、制度派経済学の創始者であるヴェブレンの名前が俎上に挙がる。本稿は、ヴェブレン研究者としても著名であるダグラス・ダウド（Douglas F. Dowd）の所説を通じて、その経済学の現代的な意味を考えることにした⁽¹⁾。

ヴェブレンの分析は経済学および経済の領域において、常に「純粹経済学」を超えて「進化論的」フレームワークの中で社会政治学的、人類学および心理学的なものを結合した領域にまで広がっている。彼は主流派経済学を人間と社会の双方の本質に気づかない論理的矛盾の混合物と看做した。その研究対象は主として合衆国に焦点を合わせた経済の研究であったが、イギリス、ドイツおよび日本の発展過程の本質的違いに関しても重要性を持っている。より具体的には、彼の関心を最も惹きつけた進化は当時の主流派経済学者のいかなる関心も得られなかった次の5つである。(1)合衆国のビジネスシステムの本質と進化——その巨大なビジネスシステムの出現、新しい産業技術の誤用、およびその当時急速に拡大してゆく国家の統制。(2)帝国主義及び国家主義の根源および帰結、(3)政治経済におけるメディアの役割の出現、(4)「コンシューマリズム」と呼ばれるようになってきたものの起源、本質および意義、および(5)これらの社会的プロセスのどの側面とも関連している完全な浪費性に関する首尾一貫した強調⁽²⁾。

これらすべてのプロセスがヴェブレンの時代以降、形を変え、そのダメージを広げ、深められてきた。彼の洞察は当時よりも現在の方がより価値がある、といえる。

ダウドによるヴェブレンの所説の吟味は、まず全体像について、次に人間性の概念に関する見解、さらに社会分析の主要な要素へと進んでゆく。そして主流派経済学の批判の後で、最後に現代におけるヴェブレンの有効性について論じている。

2. ヴェブレンの基本的視点：金銭文化と有閑階級

彼は、制度（institution）を重視するが、その支配力は支配的な制度、すなわち、文化における「制度化された」特定のプロセスを経由して行使される。ヴェブレンが分析の対象とした合衆国は豊富な資源、新しいテクノロジーを利用する機会、巨大企業、多くの人口などといった点においてマルクスが分析の対象としたイギリスとは著しく異なっていた。しかし、両者が研究対象としたものが資本および産業プロセスに支配されていた点で共通していた。

恐らくヴェブレンはその当時の合衆国の誰よりもマルクスおよびマルクス主義者の著作を読み、尊敬していたが、探求を社会学や心理学の領域まで拡張し、「われわれを動かす原動力」に関してマルクスよりもさらに深く調べる必要がある、と考えた。そうする際に彼は、マルクスが資本主義という文化を理解しなければならない、と考えた。ヴェブレンは、それを「金銭文化」と呼んだ。ヴェブレンは処女作『有閑階級の理論』（1899）⁽³⁾において、資本主義制度における消費を制度として分析した。各章の表題のいくつかを見ると、「金銭的見栄」、「衒示的閑暇」、「衒示的消費」、「趣味の金銭的基準」、「産業的免除と保守主義」および「コンシューマリズム」と呼ばれるようになるものなどがある。これらすべての「社会的」分析は、人間の複雑な特性にそれらの機能を結びつける興味をかきたてるような観察で満ちている。この点については「製作本能と労働の煩わしさ」⁽⁴⁾で初めて述べられた。

ヴェブレンは人間行動の原動力としての「本能」という用語を独自の流儀で使っている、という点に注意が必要である。ヴェブレンは人間を建設的な本能と破壊的な本能という二つの対立する「本能」の統一物である、と見た。建設的な側面には製作本能と親性本能（parental bent）と好奇本能（idle curiosity）がある。これらのものは略奪的で競争的な一組の「本能」によって相殺される。製作本能は主として親性本能が価値あるものとする目的を成し遂げる⁽⁵⁾。そして好奇本能は「生存闘争において、その他の種に対する人間の大きな優位性を構成し、環境の諸力を活用することを可能にするものを持っている」⁽⁶⁾。総合すれば、これらの建設的な本能がわれわれ自身の中で協調するように導いている。それらは種を保存し、物質的な福祉ならびに「非物的」福祉を促進するために結びついている。その他の本能以上に、その他の動物の世界からわれわれを区別するのは「好奇本能」である。それは想像することや疑問に思うことに対する能力や一定の傾向に関連している。破壊的な側面は、かつては狩猟などによって演じられていた本質的な役割にはるかな起源をもっている。

ヴェブレンは「原始的」を狩猟および採取が中心の「未開時代（savage era）」との関連で用いているし、「野蛮（barbarism）」は定住農業で始まる時代に関連している。それは持続され、

「金銭文化」をつくり出した。略奪的、競争的および「差別的」である社会化された傾向を構成しているものとして「スポーツマンシップの本能」をあげている。原始時代と現代の間にある数千年間において、権力と詐取と習慣化は、それらの「本能」が支配的になることを可能にし、その原因となった。しかし、それがすべてではない。『有閑階級の理論』の基本的概念は「見栄」という概念である。「自尊心の習慣的基礎は隣人によって与えられる尊敬である。常軌を逸した気質をもった個人だけが、同僚の軽蔑をものともせず、長期的に自尊心を維持しうる。この原則に対する明白な例外は、特に強力な宗教的確信を持つ人々の間で出会う。しかし、これらの明白な例外が本当の例外であることはほとんどない。というのも、そのような人は一般的に彼らの行為のある種の超自然的な目撃者の推定的な賞賛に頼っているからである」⁽⁷⁾。『有閑階級の理論』のもう一つの主要な概念の中核にあるのが、この「見栄的」傾向である：すなわち衒示的消費と衒示的閑暇であり両者とも衒示的浪費の法則の支配を受けている。

多くのヴェブレン用語と同じように「有閑階級」という用語の使用法も独特である。彼は有閑階級を野蛮時代に存在するようになり、封建時代に「制度化された」ものとして、その「階級」を見た。多くのものは数千年という時間にわたるテクノロジーの進歩によって変容されている。しかしながら、その変容は「有閑階級」によってコントロールされている。有閑階級の標準は、たとえ野蛮時代から現代までの間に非常に形態が変わったとしても、持続されている。有閑階級のメンバーは「確立されている社会的慣習によって産業的（すなわち、生産的）職業から免除され、ある程度の名誉が付帯している一定の職業のために保留されている。そして、この免除は彼らの卓越した地位の経済的表現である。これらの非産業的な上層階級の職業はおおよそ政治、戦争、宗教儀式およびスポーツに含まれる」⁽⁸⁾。

有閑階級を習慣および思考の慣習の成長を導くものとして、特に主として経済的性格を持っていて制度に関連しているものとして見ているから、ヴェブレンは続いて次に二つの階級、それらは経済生活の二つの分岐している目的を相互にもっているものと区別している⁽⁹⁾。

ヴェブレンの有閑階級の特徴づけは非常に批判的であり、こう述べている。

「有閑階級の経済過程に対する関係は金銭的な関係であり、生産の関係ではなく取得の関係である。有用性関係でなく搾取の関係である。彼らの役目は寄生的性格をもっており、彼らの関心は、どのような内容ものでも自分自身の役に立つように変え、手元にあるどんなものでも保有する。ビジネスの因襲は、この略奪あるいは寄生的な原理の淘汰的な監視のもとで成長してきた。それらは所有権の因襲である。すなわち、多かれ少なかれ離れているが、古代の略奪文化の派生物である。この金銭的な制度的構造の直接的な目的は平和的で、秩序のある搾取の一層の促進である」⁽¹⁰⁾。

有閑階級の特徴的な態度は「存在するものはすべて正しい」というダーウィン主義の自然淘汰の法則に対して、人間制度に適用できるものとして、「存在するものはすべて間違っている」という格言が与えられる。

もちろん、「見栄を張る」のは有閑階級である。有閑階級の出現が所有権の始期と一致していることを述べるさいに、ヴェブレンはこう述べている。

「所有権の最も初期の形態は、その社会のすぐれた身体 of 男性による女性の所有であり、その始まりは明らかに女性の捕虜の獲得による低度の文化段階における男性による女性の所有である」⁽¹¹⁾。

さらに

「略奪的生活という状況のもとでの見栄の結果は、強制による結婚という形態であり、所有権という慣習である。二つの制度は、その発展初期の段階においては区別できない。双方とも英雄的行為なんらかの永続的な結果を誇示することによって、勇敢な行為を立証するための成功した男性の欲望から生じている。女性の所有から所有権の概念が労働所産を含むまで拡張され、そこから人間の所有権のみならず物の所有権が生じる」⁽¹²⁾。

『有閑階級の理論』において制度としての消費についての分析をおこなったが、そのすぐ後にヴェブレンは制度としての営利企業を分析対象として『営利企業の理論』（1904）を著した。そこにおいては、営利企業の本質と機能について分析し、さらに経済的領域と「非経済的領域」の相互作用に関しても論じている⁽¹³⁾。

3. ヴェブレンの企業論

ヴェブレンに大きな影響をうけた合衆国の経済学者のひとりであるロバート・A・ブラディ（Robert Alexander Brady, 1901-1963）は1943年に『権力の体系としての企業』を出版した。その焦点は第一次世界大戦後の6つの主要な産業的資本主義の権力にあった。すなわち、イギリス、合衆国、ドイツ、フランス、イタリアおよび日本である。ブラディはそれらすべてに同じ傾向を見出した。経済的、政治的および社会的権力の集中と統合の絶えざる増大に向かう傾向である。それは、イギリスと合衆国を除くすべてにおいてファシズムを生んだ。この書物の中で、その他の彼の著作においても同様に、ブラディはヴェブレンの志を継ぎ、それを超えており、特に

ヴェブレンの歴史の強調および社会経済的権力に対する経済的プロセスと「非経済的」プロセスを結合させる動学に関心をもっている。

経済の領域でヴェブレンが最も熱心に分析をした著作が『営利企業の理論』(1904)であり、それを展開し、アップデートしたものが、最後の著作『不在所有権と近時の企業』(1923)である⁽¹⁴⁾。これら二つの著作は主題として合衆国の資本主義を取り上げている。ヴェブレンの分析の中核には営利企業の目的および方法と産業技術の論理との間の進行中の相互作用があった。その時代においてヴェブレンに匹敵するものはいなかった。彼はそれらが全社会的プロセスを支配するものと看做した。そして、最も重要な点は補足的で相互依存的であるだけでなく、結局、対立し調和しないものである、ということである。この結論は複雑な基礎に基づいているし、すくなくとも、要約的な精密さが要求される。

それらの基礎が集まって産業主義の本質とさまざまな帰結、また、人間性と社会プロセスの間の相互作用と資本の目的、手段および力についてのヴェブレンの見解に集約されている。これらに関連した分析は、四冊の書物の中に見出される。ちょうど先ほど述べたものと、より初期の『有閑階級の理論』と『製作本能論』である⁽¹⁵⁾。

これらの著作を通じて明白なことは、合衆国の産業資本主義はあらゆる歴史を通じて最も効率的であると同時に浪費的であり、常に双方の側面においてそうになっている、というヴェブレンの確信である。矛盾しているように思われるかもしれないが、そうではない。効率は工場レベルの生産技術に関して見出される、浪費は何が生産され、いかに市場で取引されるか、またその社会経済的コストに関して見出される。『不在所有権』がちょうど出版された時にGMにより牽引された自動車産業はコンシューマリズムとなるものに対する大きな一步を踏み出した。それと関連した毎年のモデルチェンジ、それは自動車産業によって「計画的陳腐化 (Planned obsolescence)」と呼ばれるようになった。既存品に代わる新商品の買替需要の創出のためにおこなわれる。その手法には機能的陳腐化と心理的陳腐化などがある。主に耐久消費財メーカーによっておこなわれるものである。

ヴェブレンは、その当時のどんな経済学者よりもはるかに近代産業およびそのテクノロジーを研究し、理解した。『不在所有権』の「物理学と化学のテクノロジー」に関する一章は今日でさえ有益である。彼の研究は近代産業の複雑さの増大を常に示したし、それゆえに、社会的統制と計画への必要性の増大も示した。社会と企業の双方に直面し必要なことは、「誰による統制か、どんな目的のためか？」である。ある点まではマルクスと同様にヴェブレンは資本主義のイデオロギーの抵抗に向かうようになる労働者階級を生み出すものとして産業主義のプロセスを見ていた。ヴェブレンは使わなかったが搾取のために、また生産が生ずる実際的な環境が17, 8世紀に定着した資本家のイデオロギーと矛盾する、とみた。それは、普通の人々による「見栄」に向か

う傾向として見たものに大きなウェイトをおいていたためである⁽¹⁶⁾。

この関連でマルクスの時代においてコンシューマリズムは存在しなかったし、存在しえなかった、ということを述べるのは重要である。しかしながら、労働者社会へのヴェブレンの希望が見栄に関するその見解とその他の問題によって大部分強化されているのと同じように、また、労働者が新しい非資本主義的社会を創造するために自分たちを組織化しマルクスの期待も、搾取の非人間的効果についての独自の理解によって一層強化されていた。

上述に加えて、労働者の連帯に関する否定的効果は帝国主義、国粹主義、愛国心や戦争と結びついていた。マルクスは『資本論』を完成させる企てに気を取られ、そのような事柄を記したに過ぎないが、それらは資本主義発展についての『営利企業の理論』やそれに続く著作においても同様に、ヴェブレンの分析の大部分であった。——それらは疑いもなく、帝国主がすでに十分にゆるぎないものであったし、断続的な「小さな」戦争を生み、第一次世界大戦の兆しが見えていた。それほど、合衆国のキューバとフィリピンへの干渉というまでもなく、帝国主義や好戦的なプロパガンダが「営利企業」というコインのもう一つの面である、というヴェブレンにとって、有り余るほどの証拠を与えている⁽¹⁷⁾。

『営利企業の理論』の中でヴェブレンは、『有閑階級の理論』の分析を結合させている。それは『製作本能論』また特に『平和論』⁽¹⁸⁾ (1917) の一部である。愛国心と勇氣はヴェブレンが「勇氣を見せびらかす人間の根深い傾向」と見たものによって容易に助長される。それは、ビジネスのニーズと機会にぴったりと適ったものである。

「ビジネス利害は攻撃的な国家政策を推し進め、企業家をそれに向けさせる。その様な政策は愛国的のみならず好戦的である。好戦的な企業政策のもっている直接的な文化的な価値は明確である。それは大衆の側では保守的な憎悪に寄与する。軍事的な組織は奴隸的な組織である。反抗は致命的な罪である。また文明人は、階級、権威、および服従という好戦的な用語を考えるために、また、市民権の侵害を次第により辛抱づよくなる。同時に、(愛国的な理想は) 他人に対する一般的な利害、富みあるいは人間の満足の不平等な配分よりも制度的にそれほど危険な事柄ではなかったものにむけられている」⁽¹⁹⁾。

それにもかかわらず、ヴェブレンは1904年に労働者によって導かれる社会変化の脅威に対する企業家の権力の勝利を見越していた。彼はまた、それが内容のない勝利であるとも見ていた。それは独裁主義と軍国主義国家の組込みを要求する⁽²⁰⁾。そして『営利企業の理論』の最後のパラグラフでは「営利企業の十分な支配は必然的に過渡的な支配である、というこれだけのことをいうことは可能であるように思われる。二つの相違する文化的傾向のいずれが勝つかどうかは最

最終的にわかる。というのも、どちらか一方の支配と両立しないからである」と述べている⁽²¹⁾。

ちょうどマルクスが、20世紀がどんなものであるのか予知できなかったように、ヴェブレンは20世紀後半の社会経済の本質を予知できなかった。にもかかわらず両者に顕著なことは彼らの分析の非常に多くの部分が非常に適切さをもったままである、ということである。マルクスは疎外と搾取を強調し、今日「権力の集中」は、マルクスの時代よりも地上の大部分や人々にとって適応できる。そして人間行動や社会過程への形成効果はかつてよりも今日一層著しい⁽²²⁾。

その分析は現代の社会過程や関係に適応できるし、しなければならない。あるいは、それをもっと強力に進めるためには、現代の社会がより容易に彼らの分析の助力を理解しうだけでなく、彼らなしに理解することはわれわれの理解を超えている。もしも、このようなことが誇張しすぎているならば、経済学、歴史、政治科学および社会学の領域での多くの研究の吟味してみれば、それはマルクスやヴェブレンの著作から直接的にあるいは間接的に獲得した知識なしにはできないことを示している。ヴェブレンの多くの著書や論文は、ここで討議されてきているものをはるかに超える事柄に及んでいる⁽²³⁾。

正統派経済学においては、完全に合理的（rational）であることをすべて仮定している。すなわち、それは道理にかなっている（reasonable）こととは区別され計算される。つまり労働者として、消費者として、そして資本家として⁽²⁴⁾。

4. 先入観と現実

もしもわれわれが社会的存在の主要な部分——文化的、経済的、政治的——を理解しているとするならば、研究しなければならないものは何か。そしていかにしてわれわれはそれらすべてを研究しなければならないのか。それらは方法論的な問題である。次に現実それ自体の問題が存在する。それは、それらの主要な要素の何が、何故また何のためになのか、という問題である。ヴェブレンのライフワークは、一人の人間ができる最大の一組の問題の双方に答えることであった⁽²⁵⁾。

「何を」そして「どのようにして」に対する彼の方法論的反応は、正統派経済学の抽象とは著しく対照的であった。彼は(1)経済過程および経済関係は社会的存在にとって中核的である。(2)それらの過程は常にわれわれの社会文化的生活と関係を相互に変化させるように動的に相互作用している。そして(3)すべて先行するものは、絶えず進化する過程および関係として研究されねばならない。それぞれの「主要な要素」は「累積的で不可逆的な因果関係」を通じて他のものに影響を与え、影響を与えられる、と主張している。

進化論的すなわち歴史的アプローチが必要である、と仮定すると、なぜ経済的なプロセスに首

位を与えるのか。直接的あるいは間接的に、この「経済的」要因は思考習慣や感覚や生活を組織化する方法における主たるもの、すなわち「制度」である。

ヴェブレンのその著作の大部分において皮肉とウィットがある。それは意図的であり、彼の観察や結論の急進的な性質を和らげたり、カモフラージュするためである、と思われる。ヴェブレンが行なったこと同様に社会を理解するためには、真剣な社会批判という錠剤は、ユーモアという砂糖で包まれた場合にのみ飲めるという結論を導き出している。申し分のない例は、新古典派経済学において「快樂主義的人間観」と「時間のない均衡」によって演じられている役割の特徴についてのヴェブレンの初期の論文からの引用である⁽²⁶⁾。

もしも、そのような均衡が何らかの科学において見つけられるのであれば、それは物理学におけるニュートンの方法論である。そこにおいては、人間の歴史に近づくいかなる必要も余地もない。しかし、われわれは不可逆的な時代を生きている。もしも科学的なメタファーや方法が全く適用できない、としたら、複雑さと不確実性およびすべての乱雑さを伴う生物学を対象物とすべきであろう。

ヴェブレンは「制度」をわれわれが生活を組織化あるいは組織化するために生活している明白で巧妙方法として思考、感情、行動の方法と見た。問題を解決するあるいは新たな発展に対する方法を容易にするためのものである。しかし、彼はそのような制度の意図された機能が社会、現存の問題および可能性を変える、ということも見ていた。かくして、それは「間違っただけのもの」になる。現存している制度は「常識」および「現状」を表現する一つの方法である⁽²⁷⁾。

5. 現代に対するヴェブレンの分析の受容性およびまとめ

『有閑階級の理論』および『製作本能論』を今日読むことは、「人間性と行為」に関してわれわれが今日追求しなければならない問題を教えてくれる。また、『営利企業の理論』、『不在所有権』、『平和の性質』は、資本主義の権力が、もしも、その飽くことのない欲望を満たそうとするならば、国内的およびグローバルの両面において非合理性を助長するように機能でき、しなければならない方法に関する本質的な洞察を与えてくれる。

その非合理性、それをヴェブレンは「営利企業」体制の存在によって生得的なものと看做したが、あらゆる側面において企業行動を全く自然に描いている。今日われわれにとって最も明らかなことは、企業と近代メディアとの関係およびその帰結である。ヴェブレンの時代においては、印刷媒体が殆ど全く意味を持っていたが、今日では、それらはTV、ラジオおよび映画の結合された効果がより決定的である。ヴェブレンの時代では、新聞は企業の大きな目的に役立った。というのも、企業の世界や資本主義および国家主義的世界観双方の一部であったからである。今日

メディアは企業広告を通じて資金調達をするばかりでなく、次第にいくつかの巨大企業によって直接的に所有されるようになってきた。

人間性と行為は過去 100 年に大きく変わってきた。しかし、それらはわれわれの本質は建設的と破壊的という二つの相反する一組の「本能」によって苦しめられる本能で表現されたというヴェブレンの信念に応じて変化してきた。そして、進行中の社会過程によって大部分が育成される一組の本能に依存している社会である。

社会化の過程は、それが促進したコンシューマリズムによって強化される。また巨大企業の力がそれにむけられる。われわれのシステムにおけるそのような権力や傾向の固有の重要性に関するヴェブレンの論法は現代においても未だに不可欠な理解力を持っている。

しかしながら、どの程度まで彼の論法が妥当性をもっているかは『有閑階級の理論』において最も十分に研究されている「金銭的見栄」の強調から明らかである。「有閑階級」ではない平均的な人々は、マルクスが期待し予想したように、労働者の経済的、政治的および社会的民主主義の創造によって有閑階級が排除される社会を求めている。

以上がダウドの結論である。見られるようにダウドの所説はヴェブレンの多くの著作におよび、その重要な点を摘出しコメントをつける、という方法で行なわれているが、最も重要なことは処女作『有閑階級の理論』の中にその後のヴェブレンの理論的展開の基礎となる要素が含まれている、と指摘している点にある。特にヴェブレンの社会経済に関する見方の前提には、本能に基づく能動的な人間観があり、所与の環境への適応過程において思考習慣、すなわち制度が形成され、それにより、われわれの行動が支配される、という点とその本能には利己の本能と非利己的な社会的な本能という二つの類型があり、時代によりどちらかの類型が支配的になる、という点である。これが経済システムを歴史的に分析する際の基準となっている。消費者にとって、また、社会にとって社会的な本能の十全たる発現が望ましいが、現状においては利己的な本能によって動機づけられている営利企業が支配的な制度である。したがって、望むべき方向としては、この利己的な本能ではなく、社会的な本能によって支配される経済体制が望ましいというのがヴェブレンの分析の帰結である。ダウドの所説は、このようなヴェブレンの基本的な考え方を非常にうまくまとめたものであり、現代における制度主義的な手法や思考を研究する際に非常に有効な所説といえよう。

《注》

- (1) Douglas Dowd, "Thorstein Veblen: The Evolution of Capitalism from Economic and Political to Social Dominance; Economics as its Faithful Servant," in Douglas Dowd (ed.), *Understanding Capitalism: Critical Analysis from Karl Marx to Amartya Sen* (London: Pluto Press, 2001), pp.

37-56.

- (2) *Ibid.*, pp. 37-38.
- (3) Thorstein Veblen, *The Theory of The Leisure Class: An Economic Study of Institutions* (New York: Augustus M. Kelly, Bookseller, 1975).
- (4) Dowd, *op. cit.*, pp. 39-40. Thorstein Veblen, "The Instinct of Workmanship and The Irksomeness of the Labor" in *Essays in Our Changing Order* (New York: Augustus M. Kelly, Bookseller, 1964), pp. 78-96.
- (5) Thorstein Veblen, *The Instinct of Workmanship And the State of Industrial Arts* (New York: Augustus M. Kelly, Bookseller, 1964), p. 48. 注意すべきことは製作本能は補助的な本能である、という点である。ヴェブレンも述べているように、その機能的内容は生活の目的に対する有用性出合い、具体的な目的を持っていない、という点において特異な位置づけにある (*ibid.*, p. 31)。
- (6) *Ibid.*, p. 48.
- (7) Veblen, *The Theory of The Leisure Class*, p. 30. 小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波文庫, 昭和 36 年 5 月, 36 頁。
- (8) *Ibid.*, p. 5, 同上訳書, 9-10 頁。
- (9) Dowd, *op. cit.*, p. 44.
- (10) Veblen, *The Theory of The Leisure Class*, p. 209, 同上訳書, 209-210 頁。
- (11) *Ibid.*, p. 22. 同上訳書, 28 頁。
- (12) *Ibid.*, pp. 23-24. 同上訳書, 29 頁。
- (13) Dowd, *op. cit.*, pp. 45-46. Thorstein Veblen, *The Theory of Business Enterprise* (1904).
- (14) Thorstein Veblen, *Absentee Ownership And Business Enterprise in Recent Times: Case of America* (1923).
- (15) Dowd, *op. cit.*, pp. 46-47.
- (16) *Ibid.*, pp. 47-48.
- (17) *Ibid.*, p. 48.
- (18) Thorstein Veblen, *An Inquiry into The Nature of Peace*.
- (19) Veblen, *The Theory of Business Enterprise*, pp. 391-393.
- (20) Dowd, *op. cit.*, p. 49.
- (21) Veblen, *The Theory of Business Enterprise*, p. 400.
- (22) Dowd, *op. cit.*, p. 49.
- (23) *Ibid.*, p. 50.
- (24) *Ibid.*, p. 50.
- (25) *Ibid.*, p. 51.
- (26) *Ibid.*, pp. 51-52.
- (27) *Ibid.*, pp. 52-53.

(平成 23 年 9 月 30 日 提出)